

患者の視点に立脚した移行期ケアの質向上につなげるための、日本語版患者経験指標 (Patient Reported Experience Measure : PREM) の作成 (30-36)

主任研究者 和田 忠志 国立長寿医療研究センター
在宅医療・地域医療連携推進部 医師

研究要旨

2年間全体について

中間ケア (Intermediate care) は、予防可能な疾患患者や症状の再発、再燃をしやすい患者に対して、患者が安心して療養するために提供する、短期間での再入院要因の予防と自立支援のためのケアである。

日本には、中間ケアという概念がなく言葉も普及していないが、日本にも中間ケア関連概念と中間ケア機能を期待されているケア現場は存在する。

日本における中間ケアは、患者が安心安全に生活の場に戻るためにADLを改善したり、介護体制を整えたり、セルフケアを強化する機能であり、地域包括支援病棟 (医療保険) や回復期病棟 (医療保険)、介護老人保健施設 (介護保険)、移行期ケア (医療保健) が該当する。

中間ケアの質向上は先行研究から「避けられる短期間での再入院 (同様の疾患による退院後3か月以内: 肺炎や転倒など)」「患者の自立促進 (地域移行の促進やQOL上昇など)」に有意に影響することが明らかになっており、中間ケアの質向上は日本では喫緊の課題であるといえる。

日本で使用できる中間ケアの質を評価する尺度もない。

そこで、日本の既存文献から中間ケア概念の存在を確認し、さらに中間ケアの先進国で使用されている中間ケアの質評価尺度 (Patient Reported Experience Measure : PREM) の日本語版を、日本の患者や中間ケアに関わる看護職が活用可能な言葉で作成した。

今後、日本の中間ケア現場でデータ収集を行い、統計学を用いて今回作成した日本語版PREMの信頼性と妥当性の検討を行う。

2019年度について

日本語訳 PREM の内容妥当性の検討と、表面妥当性の検討を行い、実用可能な日本語版PREMへ整えた。

内容妥当性の検討は、国立長寿医療研究センターの看護部において中間ケアに関わる看護管理者のフォーカスグループにて、日本語訳 PREM の意味している内容が日本の臨床現

場や療養環境により相応しくなるように言葉を整えた。

表面妥当性の検討は、国立長寿医療研究センターにて療養支援を受けた患者の代表者と医療ソーシャルワーカー、国立長寿医療研究センターから療養支援を受けた患者の支援を引き継いだ経験をもつ介護支援専門員というメンバーとともにフォーカスグループで、日本語訳 PREM の質問意味の理解の共有や、回答しやすい文章への変更、回答選択肢の変更を行った。

整えた日本語版 PREM(暫定)を当研究に関わらない翻訳者が英語に逆翻訳し、オリジナル PREM を開発した研究班に日本語版 PREM としての承認を得るために提出した。

主任研究者

和田 忠志 国立長寿医療研究センター 在宅医療・地域医療連携推進部 医師

分担研究者

三浦 久幸 国立長寿医療研究センター 在宅医療・地域医療連携推進部 部長

後藤 友子 国立長寿医療研究センター 在宅医療・地域医療連携推進部 研究員

研究期間 2018年4月1日～2020年3月31日

A. 研究目的

本研究は英国の国民保健サービス (National Health Service : NHS) で使用されている、中間ケアの評価指標 PREM (Patient Reported Experience Measure) の日本語版を作成することである。

B. 研究方法

2年間全体について

【PREM 測定概念と日本の中間ケア関連概念を特定し、PREM が測定している中間ケア概念との相関性の確認】

PREM 概念が存在しない場合、PREM 尺度では測定することができないことから、まず日本で PREM が測定している、中間ケアの関連概念の存在有無を確認する必要がある。

方法：文献レビュー

文献検索サイト：メディカルオンラインと医中誌 Web

検索式：P：看護師

E：「継続看護」or「患者ケアの継続」or「移行期のケア」or「治療の継続」or「退院」

C：比較対象なし

除外ワード：「小児」or「妊産婦」or「産褥」or「褥婦」or「未成年」

0 : 「質問紙」 or 「評価」

指定条件 : 「本文フリー」 and 「2014～2019 年」

日本における中間ケア現場で共通して関わっている看護師をキーワードに加え検索した。

【日本語版 PREM の作成】

PREM とは

NHS が患者の視点に基づくケアの報酬評価を行うため開発した、中間ケアサービスに特化した患者がケア体験を報告する 15 問のリッカート回答式の質問紙である。

Bed base (入院や入所する形態の中間ケア) と Home base (移行期ケア) の 2 パターンがある。

NHS はあらゆる保健医療サービスを患者中心のケア概念である Picker の 8 原則を基盤にした患者経験報告式調査を実施し、医療を評価している。

Picker の 8 原則とは

1. 患者の価値、好み、表明されたニーズの尊重
2. ケアの調整と統合
3. 情報と教育
4. 物理的な快適さ
5. 感情的なサポートと恐怖と不安の緩和
6. 家族や友人の関与
7. 継続性と移行
8. ケアへのアクセス

手順

原版開発者である、英国 NHS (National Health Services) においてオリジナルの PREM 開発チームの代表者である Elizabeth Teale 博士に日本語開発に関する承諾を得た。

原版 (英語) から日本語版へ 2 名の独立した翻訳者による順翻訳を行い、尺度開発研究の経験をもつ研究者 2 名が 1 つに統合した。その日本語訳 PREM を 2 つのフォーカスグループで内容妥当性の検討、表面妥当性の検討を行い。当研究に関わっていない 1 名の翻訳者が逆翻訳し、オリジナルの PREM 開発チームの代表者である Elizabeth Teale 博士に提出した。

2019 年度について

日本語訳 PREM の内容妥当性の検討

研究デザイン : フォーカス・グループ・ディスカッション

研究参加者 : 国立長寿医療研究センター看護部に所属し、中間ケアに関わる看護師管理者

使用する質問紙 : 統合された日本語訳 PREM

検討内容：オリジナルの PREM が測定している中間ケア概念と定義を解説した上で、オリジナルの PREM が示している意味を変えないように、日本の中間ケア関連概念に当てはまる言葉に置き換える。

日本語版 PREM の表面妥当性の検討

研究デザイン：フォーカス・グループ・ディスカッション

研究参加者：国立長寿医療研究センターで療養支援を受けた経験をもつ患者代表者、
国立長寿医療研究センターで療養支援に関わった医療ソーシャルワーカー、
国立長寿医療研究センターで療養支援を受けた患者を引き継いで支援した介護支援専門員

検討内容：日本語訳 PREM が示している言葉の示す内容のわかりやすさ、回答のしやすさについて意見を得て、言葉を整える。

(倫理面への配慮)

人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に従い、研究遂行する。

C. 研究結果

2 年間全体について

【PREM 測定概念と日本の中間ケア関連概念を特定し、PREM が測定している中間ケア概念との相関性の確認】

地域包括ケア病棟や回復期リハビリテーション病棟、移行期ケア（退院前・後訪問指導）は診療報酬という健康保険法等による診療報酬制度によって評価されている。

健康保険法は、労働者又はその被扶養者の業務災害以外の疾病、負傷若しくは死亡又は出産に関して保険給付を行い、もって国民の生活の安定と福祉の向上に寄与することを目的とすることを明示している。

介護老人保健施設は介護保険法に基づく介護保険制度で評価されており、介護保険法では、被保険者の要介護状態又は要支援状態(以下「要介護状態等」という)に関し、必要な保険給付を行うものとする、前項の保険給付は、要介護状態等の軽減又は悪化の防止に資するよう行われるとともに、医療との連携に十分配慮して行われなければならない、と明示されている。

これら日本の健康保険法や介護保険法の文面から、英国の中間ケア定義は日本の医療や介護の考え方と大きな相違や乖離がないと示唆された。

次に文献を抽出した。

メディカルオンラインでは該当する文献が抽出されなかった。

医中誌 web では 42,290 文献が抽出された。さらに、本文無料、看護文献、5 年以内

(2014 年～2019 年)に限定し再検索を行い、結果 690 文献が抽出された。それらすべてをスクリーニングし、研究目的に沿った内容の 14 文献を抽出した。さらにハンドサーチで 8 文献を追加し、22 文献をレビューの対象とした。

文献から抽出された看護師視点での中間ケア関連概念は以下の 9 つに収束した。
患者と家族の価値観、経験、思いに関する情報収集と確認/患者アセスメント/患者の自立を支持する姿勢/治療に関する相談と医師との連携/様々な専門職や社会資源に関する情報提供と調整/褥瘡、転倒、誤嚥などの予防的日常生活ケアの教育/苦痛を和らげるためのサポートとチームアプローチ/家族への関わりとサポート/病状や心身状態に応じた退院後の生活イメージの共有とサポート体制の調整

中間ケアを提供するために求められる施設内や看護管理者の役割も明らかになった。
退院支援、退院調整のための支援ツールや担当部門の設置/看護師やスタッフ対象の教育機会の提供/多施設・多職種・多部門と患者家族との連携/調整のサポート

患者視点での中間ケア関連概念も抽出され、以下の 8 つに収束した。
患者の気持ちや価値観、経験への関心と理解/患者を尊重し支える姿勢/急変時や予後に関する情報を共有し、一緒にケアを決める/的確、迅速な患者の病状や精神状態のアセスメントと対応/病気や治療、処置、自己管理に必要な情報の提供/苦痛の軽減/患者に必要な時の医師や栄養士、薬剤師などとの連携/話しかけやすい身なり・雰囲気・声掛け

日本では、中間ケアに関わる概念として、看護師視点の現象が多く抽出されており、○科や○病棟といった疾患や病棟機能別の質問紙や概念が中心であった。また、日本においても患者自身が受けたケアの経験をケアの質評価に活かす考え方があったことが確認された。

この結果から中間ケア概念を測定している PREM を用いることで、日本でも中間ケアに関連する概念が測定される可能性があることが示唆された。

2019 年度について

【日本語版 PREM の試作版作成】

電子メールにて、PREM 原版開発者である Elizabeth Teale 博士に日本語版開発の承認を得た。そして、イタリア語版を開発した Paola Rucci 博士から多言語版尺度開発にかかる手順の情報提供を受けた。

まず、英語圏で保健医療業務に従事した経験を持つ 2 名の翻訳者が、独立して原版の英語を日本語に順翻訳した。それらを中間ケアに関する知見をもつ研究者と、尺度開発研究の経験を持つ研究者、日本の中間ケア提供に関わる指導的実践者とともに 1 つの日本語訳 PREM を策定した。

日本語訳 PREM の内容妥当性の検討

オリジナルの PREM が示している意味を変えないように、国立長寿医療研究センター看護部に所属する中間ケアを提供する看護師と話し合いながら、日本語訳 PREM の日本の中間ケア関連概念に当てはまる言葉に置き換えた。

日本語訳 PREM の 128 か所を改変した。

日本で使用されている言葉への置き換えや、翻訳言葉や研究用語を日常言葉へ変換した。回答設問も、日本人の患者が回答しやすいように変更した。

日本語版 PREM の表面妥当性の検討

内容妥当性の検討を終えた、日本語訳 PREM を、日本で中間ケアを受けた患者とその支援者と共に、患者がわかりやすく、答えやすい文章表現に置きかえた。暫定的な日本語版 PREM が完成し、1 名の翻訳者により逆翻訳を行い、オリジナルの PREM 開発チームの代表者である Elizabeth Teale 博士に提出した。

D. 考察と結論

PREM の測定概念は近年世界各国の保健医療が目指す方向であり、日本でも「患者中心のケア」「患者の視点に寄り添ったケア」の必要性が広まっているところである。また、文献レビューからも PREM の測定概念は日本の中間ケアの各セクション(退院支援や、在宅医療、介護サービスにおけるケア等)でも求められているスタッフの能力として整合性があると考えられる。

日本の保健医療政策も、質の向上や患者の価値中心、ケア中心、統合にむけて医療やケア評価の方向性を示しており、PREM は今後の日本においても求められる評価指標となる可能性がある。現状の日本のケアの質に関する問題として、縦割り化した中間ケアが個別に評価指標や質管理基準を開発しており、全体的なケアの質の底上げが難しい状況に陥っている点である。

日本の中間ケアは機能別に異なる目標を掲げ支援している。地域包括ケア病棟であれば在宅復帰率がケアの目標であり、回復期リハビリテーション病棟では ADL など身体機能改善や軽快退院率が目標となる。介護老人保健施設も在宅復帰率や自立支援が目標となりその評価方法が確立していない。移行期ケアは、現状では明確な目標が定められておらず、退院支援という退院がケアのゴールになっている。

中間ケアのアウトカムは、短期間での再入院率の減少である。日本においても支援をした患者のその先(短期間でも再入院)の改善を見据えたケアの質評価を導入し、全体的なケアの質の向上に努める必要があると考える。

そのためにも、現在は個別で評価されている地域包括ケア病棟や回復期リハビリテーション病棟、移行期ケア、介護老人保健施設の質を一つのケア(中間ケア)として統合し、

共通するケアの質で評価し、全体的な改善を促していく必要があると考える。

日本では、高齢患者の増加に伴い、同疾患による短期間での再入院の増加や、入院期間の延伸により医療財政の増大化と急性期病院の疲弊が社会問題化している。さらに、早期退院により患者は不安と不満をもちながら退院している現状も急性期医療機関のスタッフの心的負担や葛藤を生じさせている。

そのことから、高齢者医療、ケアを専門とするナショナルセンターである国立長寿医療研究センターが日本で初めての中間ケアの評価指標を開発することが求められていると考える。

今回、日本の中間ケア関連概念が特定され、英国で開発された中間ケア評価指標 PREM でも中間ケアに関連する概念が測定できる可能性が示唆された。また、日本の中間ケアを受けた患者に理解可能で回答可能な日本語版 PREM の暫定版が作成できた。今後は日本の中間ケア現場でデータ収集を行い、日本語版 PREM の信頼性と妥当性を統計的に検証する必要がある。

E. 健康危険情報

なし

F. 研究発表

1. 論文発表

2018年度

- 1) 和田忠志 I. 1 なぜ、今、在宅医療連携か 5 自宅に帰れる患者をどう見出すか? 6 在宅療養現場に患者を帰すにあたって V. 1 病院・在宅医療連携研修の実際 「在宅復帰支援」 南山堂 8-10, 32-41, 198-202, 2018
- 2) 和田忠志 「在宅医療 臨床入門」 南山堂 1-137, 2018
- 3) 和田忠志 2 フレイル介入の実践 在宅医療 「フレイルのみかた」 荒井秀典編 中外医学社 179-185, 2018

2019年度

なし

2. 学会発表

2018年度

- 1) 千田一嘉, 西川満則, 和田忠志, 三浦久幸 在宅医療支援病棟における地域包括ケアシステム構築のためのトランジショナル(移行期)・ケアの提言と実践 第115回 日本内科学会総会・講演会 2018.4.14 京都市勧業館
- 2) 千田一嘉, 西川満則, 和田忠志, 三浦久幸 患者視点に立脚したアドバンス・ケア・プランニング(ACP)を活かす地域包括ケアシステム構築のためのトランジショナル

- (移行期)・ケア 第60回日本老年医学会学術集会 2018.6.16 国立京都国際会館
- 3) Senda K, Wada T, Satake S, Kinoshita K, Takanashi S, Matsui Y, Miura H, Arai H. Electronic communication tool to support, record, share process of advance care planning (ACP) with adopting frailty evaluation axis in interdisciplinary transitional care at the view of the patient in Japan. 14th EuGMS 10-12 October 2018 Berlin
- 4) Wada T, Senda K. What's Happening 12Years After the Elder Abuse Prevention Law was Implemented in Japan, The Gerontological Society of America's 71th Annual Scientific Meeting, 2018.11.15. Boston, USA.

2019年度

- 1) 千田一嘉、和田忠志、三浦久幸；高齢患者の医療・ケアの説明とその反応・理解に関する情報を多職種で共有して協働する在宅医療・ケアのための ICT ツールの開発
第61回日本老年医学会学術集会 2019.6.8 仙台

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他